

叛命

高木 俊朗

抗 命

インパール作戦―烈師団長発狂す

文藝春秋刊

抗命

定価 四五〇円

昭和四十一年二月二〇日 第一刷

著者 高木 俊朗

発行者 上林 吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五―一二一一

印刷 凸版印刷
製本 中島製本

万一乱丁落丁がありましたらおとりかえします

©1966 TOSHIRO TAKAGI

Printed in Japan

抗命 目次

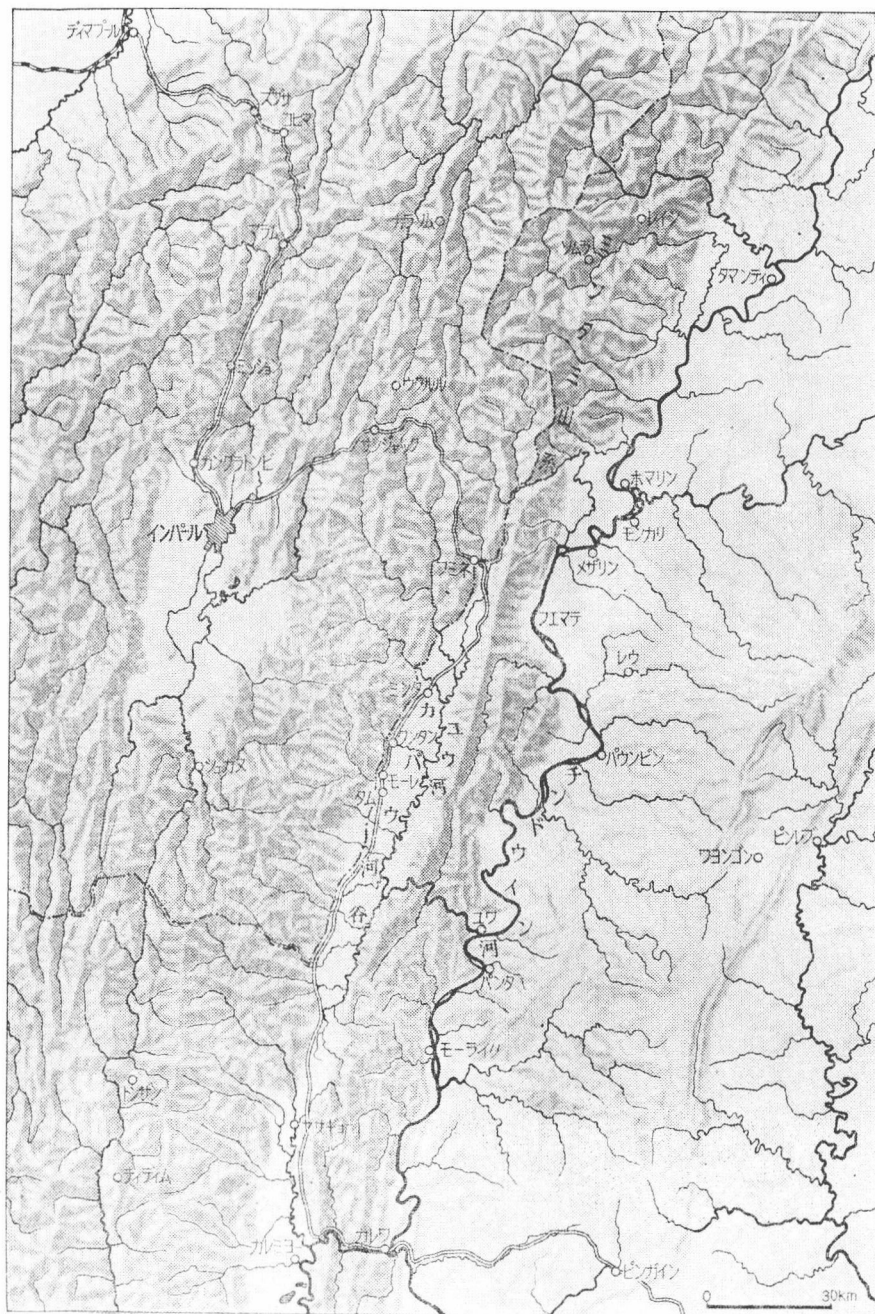
秘史の録音	5
牟田口文書	20
インド進攻	38
撤退の決意	72
アラカン越え	101
コヒマ戦線	124
独断命令	174
豪雨と飢えと	184
暗夜の対決	198
師団長解任	238
精神異常者	252
戦いの跡	266
あとがき	295

題字・裝幀
地圖作成

竹中 誠子
高野橋 康

抗 命

インパール作戦——
烈師団長発狂す



秘史の録音

私はそのことが次第に気がかりになってきた。それが事実かどうかを知りたいと思った。そのため私が国立国会図書館をたずねたのは、昭和四十一年六月のはじめであった。つゆの雨が、やや強く降りつづいていた。

東京新聞の竹部記者が同行していた。私はどの程度に話を聞きだすことができるかに確信がなかった。それは国会図書館の事業に関連したことであり、また多少、機微にふれる問題をふくんでいたからである。私はそのために竹部記者をさそいだした。

受付で係員がとりついでいる間、私は外をながめていた。大きなガラス戸をへだてた、舗装された広庭には、雨足が無数の輪をまき散らしていた。周囲の新緑の木々のさきには、私の知らなかった新しい様式の建物が数多く建っていた。それが雨のなかで、美しい色調を見せていた。私は、東京も変わったな、と感じた。

このあたりは、国会議事堂の重苦しい建物を中心に、国会関係の粗末な木造建築が不統一にならんでいたところである。それが今は新鮮な構成美をきそう現代都市風景をえがきだしている。戦後二十年の歳月は、政治の中心ともいふべき永田町を、すくなくとも外観だけを、一変させてしまった。

「ビルマの雨季は激しいそうですね」

竹部記者が話しかけた。唐突の話題のようであったが、そうではなかった。この日のことに密接な関係がある話だった。

「雨の降らない乾季が約半年つづいて、そのあと雨季になると、半年雨が降りつづきます」

ビルマは南北に長い国だから、地域によって違いがあるにしても、雨季は大体、五月にはじまって十月まで、五ヶ月はつづいた。

「つゆが半年というわけですね」

「それが毎日、集中豪雨のような降りかたをするのだから、処置なしですよ」

私はビルマですごした雨季の日々を思い浮かべた。激しい雨としぶきで、あたりは霧のたちこめたように薄れていた。川のように水の流れている所が道路だった。そのなかで、点々とむらがり、平然と雨にうたれたままにいる、からすの黒い姿が無気味だった。そして、時どきは、のら犬がさまよっているだけで、すべての生物は死滅したかと思われるほど、荒涼とした風物であった。おびただしい湿気と、よどんだようなむし暑さのために、人も物も汗ばんでいた。

前線の陣地では、たこつぼと呼んでいた個人壕こじんごうのなかに水がたまって、兵は、ふろにはいっているように、水づかりになっていた。そのために、手足の皮が白くただれて、むけおちたというようなことは、もう耳新しいことではなくなっていた。

そのころ日本軍は、ビルマから国境を越えてインドにはいり、マニプール州の州都インパールに向って攻撃した。それが惨敗に終って全軍が退却していた。日本軍の敵は連合軍だけではなかった。それ以上に猛威をふるって日本軍を苦しめたのは、インド、ビルマの雨季の豪雨であった。「しかし、雨季のあることぐらいは、日本の軍司令官や参謀も知っていたでしょう」

「知っていても、見込みがいになったし、負けがこむと、雨季でもなんでもむり押しに押しから、損害が大きくなるばかりだったのです」

それから、われわれは国会図書館の法律政治課の三谷課長に会った。あらかじめ質問の要点を伝えてあったので、すぐその話になった。

「私の課で、政治史資料を録音して保存する仕事をしていますが、予算の関係で、ほとんど進行していませんのです」

はじめから、ひどく気をつかった話しかたであった。私は確かめたい問題にふれた。

「牟田口廉也氏の録音をしたそうですね」

インパール作戦を強行した、当時の軍司令官のことである。そしてまた、日華事変の発火点となった華北の蘆溝橋で、最初の交戦をした部隊の連隊長であった。太平洋戦争の史上では、最も

国会図書館で、政治史資料の録音をはじめたのは昭和二十九年であった。政治史に重要な役割をはたした人々に、直接、体験を語らせて録音をし、ながく同館に保存する計画である。そのための録音であった。録音の内容は、本人が死亡してから三十三年間は公表されないことになっていた。この条件があるために、当事者がそれまで口外しなかった秘話が語られていることが多いと見られていた。また、国会図書館の事業というので、歴史資料として信頼度の高い内容になっているということでもあった。



重要な人物のひとりである。

「はい、前後二回あります。はじめは蘆溝橋事件の真相のお話でした。二度目はインパール作戦について録音しました」

私は三谷課長に質問をつづけた。

「最初の録音はいつでしたか」

「昭和三十八年四月二十三日でした」

「インパール作戦の話は」

「昭和四十年二月十八日です」

三谷課長は答えを用意していたらしく、よどみがなかった。

最初の録音は新憲法制定の裏話であった。これには吉田茂、金森徳次郎、佐藤達夫の諸氏など、新憲法作成に関係した人々の話を集めた。その次は、日本軍に暗殺された張作霖の顧問であった町野武馬氏である。

その後、予算不足で十年近く中断したのち、また再開した。この時、選ばれたのが今村均元大將と、牟田口元中將であった。今村元大將は満州事変発生当時の事情とか、二・二六事件前後の旧陸軍部内の対立について語った。

牟田口元中將は蘆溝橋事件を語って、日華事変の最初の発砲者は日本軍か中国軍かの疑点を明らかにしたという。さらにその後、時期を改めて、インパール作戦について語った。

私は、その時の録音のことで、もっと確実なことを知りたかった。そのことを三谷課長にたのむと、今度は調査および立法考査局という長い局名のへやに案内されて、西野照太郎主幹に紹介された。牟田口元中將の談話を録音する時にも立ち会った人である。西野主幹はこだわりのない調子で、当日の状況を語った。

録音は国会図書館の六階会議室でおこなわれた。元將軍はインパール作戦の戦闘経過をあらわした大きな要図をテーブルにひろげた。

七十六歳になる、すでに老衰のかけのあらわれた、小柄なからだであったが、そうした動作には、軍司令官当時の習性が身にしみついているのを感じさせた。

話をする時には、謄写版ずりの印刷物を手にしていた。それには、話の要旨がまとめてあった。

また、英国のアーサー・バーカー中佐という人の手紙もひろげておいた。その内容は、牟田口軍司令官の作戦は優秀であったとほめているということであった。録音のなかでも、この手紙のことにふれ、「自分の真価は英国将校によって認められた」という意味のことを語ったという。

「どうして牟田口さんが選ばれたのですか」

「この事業の計画に、積極的に協力をしてくれた人がいるわけですが、そのなかのひとりの山本有三さんの推薦でした」

「小説家の山本さんですね」

「そうです。元参議院議員で、国会図書館とも関係があるものですから」

「山本さんの推薦とは意外ですね」

山本有三氏はかねてから、日華事変当時の近衛文麿首相に与えられた非難が正しくないと考えていた。近衛首相が優柔不断のために陸軍の策謀にまきこまれ、日華事変を拡大させてしまったとするのは、近衛首相を誤解しているというのである。そのために日華事変の発端が、日本軍の陰謀ではなくて、ソ連や中国の八路軍の謀略によるものであることを立証しようとした。そして、荒木貞夫元大将、河辺正三元大将、牟田口廉也元中将その他の関係者の証言を速記させた。

その後、この仕事は歴史上に重要な意義があると見て、国会図書館の事業とすることにした。

「蘆溝橋は、いわば太平洋戦争の発端だから、録音に残すのは当然と思いますが、どうしてインパールをとりあげることになったのですか」

「それは国会図書館としては計画にいられてなかったのです。ところが、蘆溝橋の録音の時に、牟田口さんが自分から、インパール作戦をぜひ話したいといいだしたのです」

「国会図書館の資料に、ぜひ残したいというつもりだったのですかね」

「そうようですな」

私は、一冊のパンフレットをとりだして、西野主幹に示した。私が国会図書館にきたのは、その内容を確かめたためであった。

西野主幹はパンフレットの表紙の文字を読んで、おどろいたらしかった。

「ほう、こんなものがあるんですか」

表紙には△一九四四年ウ号作戦に関する国会図書館における説明資料▽という題名と、牟田口廉也の名があった。活版ずり三十二ページの小冊子である。ウ号作戦というのはインパール作戦のことであった。当時、軍は外部に秘密にするために、こうした秘匿名を使った。

「牟田口さんの話の内容は、それと同じものですか」

西野主幹は目を通して、うなずいた。

「大体同じです。こんなことを話しました」

これで、牟田口元中将が国会図書館で語った内容を確認することができた。竹部記者はめがねを光らせて、皮肉な笑いをうかべた。

「録音内容は三十三年間は公表禁止ということだそうですが、こんなパンフレットがでてはなん

にもなりませんね」

つゆの雨は、全く同じ調子で降りつづいた。帰りの車のなかで竹部記者は、

「よかったですね、はっきりしたことがわかって」

私は気持ちが悪くなっていた。

「あのバンフレットと同じ内容のものが、歴史の資料として残るのは困ると思うんです」

竹部記者は、ふいに思いついたように、

「ところで、どうして、あんなバンフレットを手にいれたんです。国会図書館でも全然知らなかったじゃないですか」

「インパール作戦の生き残りが送ってくれたんです。あのなかに、私の名が出ているからというので」

「ほう、ちょっと見せて」

私は、そのページを示した。そこには次のように記してあった。

「しかし、一方において、陸軍報道班員としてインパール作戦に参加した高木俊朗氏は『実録太平洋戦争』のなかで、柳田中将の更迭を申請した私を攻撃している▼

柳田中将は第三十三師団長で、インパール作戦の最中に更迭された。この作戦間には、柳田中将をふくめて、三人の師団長が解任された。それは牟田口將軍のひきいる第十五軍の師団長の全部であった。世界の軍事史にも類のない異常な事件であった。

竹部記者はパンフレットに目を通して、

「牟田口さんから、モノを申されましたな」

「それで国会図書館にかけつけて、というわけではないんですよ。実はあの牟田口文書のこと、インバールの生き残りがたいへんに怒っているんです」

われわれは内幸町で車をおりて、喫茶店にはいった。私は、牟田口文書を送ってくれた人の手紙を竹部記者に見せた。そのなかには次のような字句があった。

▲過日、NHKテレビのインパール作戦回顧の放送でも、牟田口だけは、終始いいわけの言葉ばかりで、自己反省の片鱗^{へんりん}も見ることのできなかったのは、腹が立つよりもさきに、輕蔑^{けいびやう}の感情がわくばかりでした▼

テレビの『インパール作戦』の放送のあったのは、昭和四十年七月十六日である。

手紙には、さらに次のように書いてあった。

▲牟田口文書のなかでは、各師団長、ことにわれわれの三十一師団長、佐藤幸徳中将が、牟田口の思うとおりに動かなかったことが、敗戦の原因と断言してはばからない態度は、武人の風上におけないものと痛感します。このままでは、われわれ生き残りとしては申しわけなく思います。

最近、故師団長に関する文書が発見されましたので、印刷して戦友に配布しました。それをごらん願います▼

佐藤師団長はインパール作戦の時、牟田口軍司令官に反抗して、師団をコヒマの戦線から撤退

させた。軍法としては明らかに抗命罪に相当する行動であった。しかし、状況から見れば、牟田口か佐藤か、いずれが正しいかは、今なお論議のわかれるところであった。私に送られてきた文書というのは、二枚の粗末な謄写版ずりにすぎなかった。日付は昭和四十年九月三十日になっていた。牟田口文書が配布されたのは、その年の七月である。明らかに、それを読んで憤激してのことである。そこには故師団長のために、一矢をむくいようとする生き残りの悲願がこめられているように思われた。

文書には△烈師団長佐藤幸徳閣下について▽という見出しがついていた。烈というのは、第三十一師団の通称名である。当時は、第三十一師団というような固有名を敵側に知られないために、すべての部隊に通称名をつけていた。

その文書には、昭和十九年七月九日、佐藤中将が師団長を解任された事情を説明してあった。日本軍のインパール攻撃は失敗に終り、各部隊は壊滅し、あるいは退却している時である。おりからインド、ビルマの雨季は最盛期にはいり、豪雨は全戦線に降りしきっていた。師団としては、最も困難な時期に、佐藤中将は解任されたのである。

さらに発令の翌日、七月十日には、

『後任師団長の到着を待つことなく、すみやかに方面軍司令部に赴任すべし』

との命令がきた。この電文の意味は、当然しなければならぬ新旧師団長の事務引きつぎを、しなくてもよいということであった。それは、すこしも早くいなくなってしまうという、悪感情